

平成31年3月1日
国土政策局総合計画課

人口減少下の土地利用計画のモデルを長野市旧中条村から発信！！ ～ 10年先、20年先を見据えたワークショップの成果をまとめます ～

国土交通省は、長野市旧中条村（伊折地区）をモデル地域として、コーディネーターとして金沢大学の林直樹准教授の協力を得ながらワークショップを計2回開催し、持続的な利用が困難な土地が増加していく現実を直視した上での将来的な土地利用のあり方について、地域住民とともに議論をしてきました。

3月10日（日）に開催する第3回では、これまでの成果を土地利用計画としてとりまとめます。とりまとめた成果は、次回3月14日（木）の国土管理専門委員会で、林准教授及び地域住民の代表者も交えて議論し、国土管理専門委員会での今後の議論に活かしていきます。

1. 概要

日時：平成31年3月10日（日）13:30～16:30

場所：長野県長野市中条御山里 7713-1
（伊折区太田公民館）

内容：土地利用計画のとりまとめに向けて

（参考）これまでのワークショップの実施内容（詳細は別紙参照）

○第1回：地域の未来を想像してみよう！（1月20日（日））

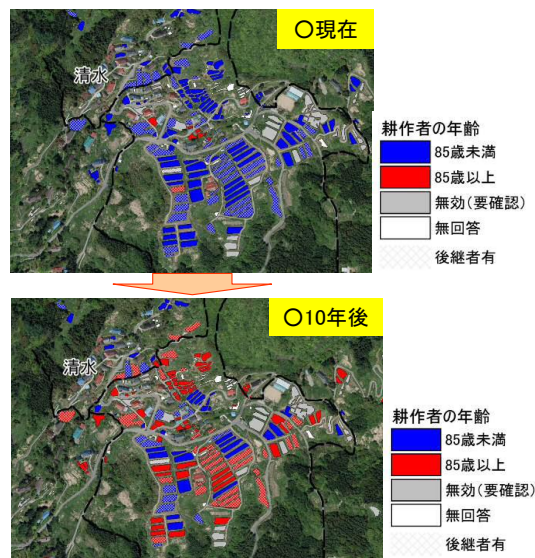
議題1 地域のいまを知る（現状の再確認・再点検）

議題2 地域の将来を考えてみる

○第2回：地域のあるべき姿を描こう！（2月20日（日））

議題1 地域で守っていききたいもの（エリア）は何（どこ）か？

議題2 それが守れなかった場合に生じる問題は？



図：棚田を含む集落内農地の現在と10年後の比較
（第1回ワークショップでの議論より）

2. 取材

- 取材希望の方は3月7日（木）12:00までに件名を「第3回長野市中条地区住民ワークショップ取材希望」とし、氏名（ふりがな）、所属、連絡先（メールアドレス、電話番号）を明記し下記メールアドレスへ送付願います。

MAIL:hqt-kokudokanri_atmark_ml.mlit.go.jp

※「_atmark_」を「@」に置き換えて送信してください。

- 取材登録後、メールにて公民館の位置や駐車場所等についての詳細をご連絡させていただきます。
- 当日13:00～13:30に公民館入口で受付を行います。
- カメラ撮影はワークショップの時間内いつでも可能です。

【問合せ先】 国土政策局総合計画課国土管理企画室 栗林、佐藤、渡邊
電話：03-5253-8111（内線29-314、29-334、29-384）、03-5253-8359（直通）
FAX：03-5253-1570

ケーススタディーの実施内容(第1回、第2回)

平成31年3月1日

実施方針

- 対象地区：長野県長野市(旧中条村伊折地区)
- メンバー：集落住民、外部有識者1名(金沢大学林直樹准教授)、等
- 実施内容：計3回に渡りワークショップを開催し、持続的な利用が困難な土地の管理のあり方について、2019年とりまとめで示す予定の検討ステップの案に沿って検討し、地域で実際に検討を行う際に生じる課題を抽出する。

実施内容

○第1回：地域の未来を想像してみよう！（1月20日（日））

- ・議題1 地域のいまを知る(現状の再確認・再点検)
- ・議題2 地域の将来を考えてみる

○第2回：地域のあるべき姿を描こう！（2月10日（日））

- ・議題1 地域で守っていききたいもの(エリア)は何(どこ)か？
- ・議題2 それが守れなかった場合に生じる問題は？

○第3回：地域でできることを考えよう！（3月10日（日））



全体の会場の様子



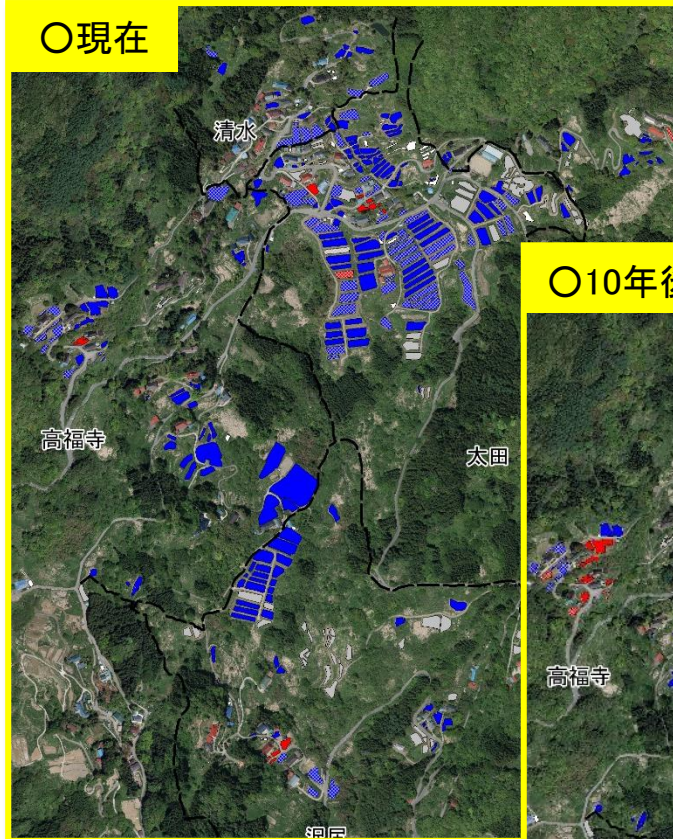
グループ討議の様子

- 事前調査した情報から作成した農地の現況区分図を見て、情報の追加・修正を行った。
- 住宅地図から推定して作成した空き家の現況図を見て、情報の追加・修正を行った。

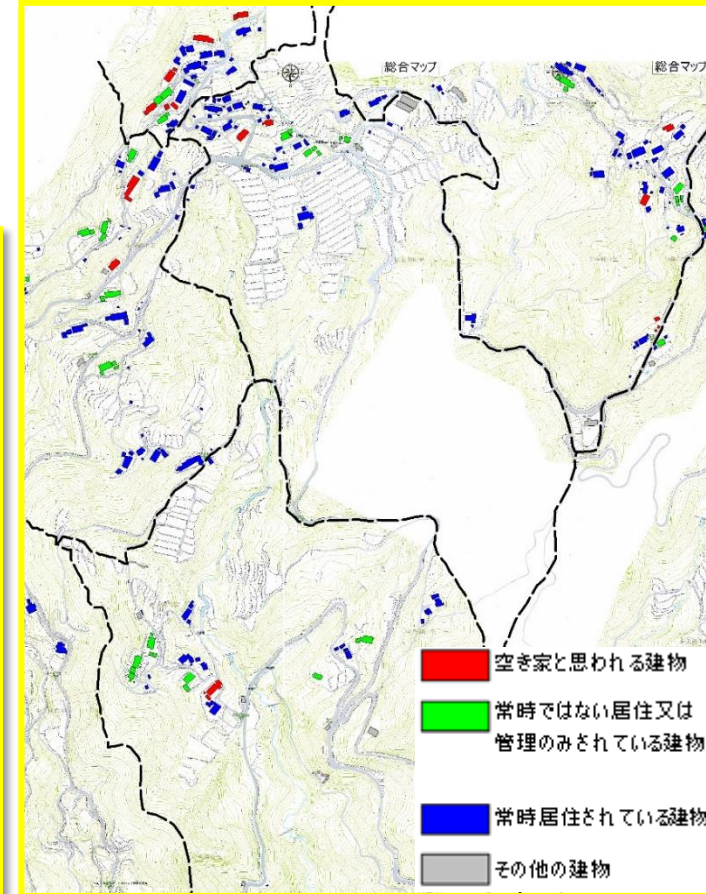
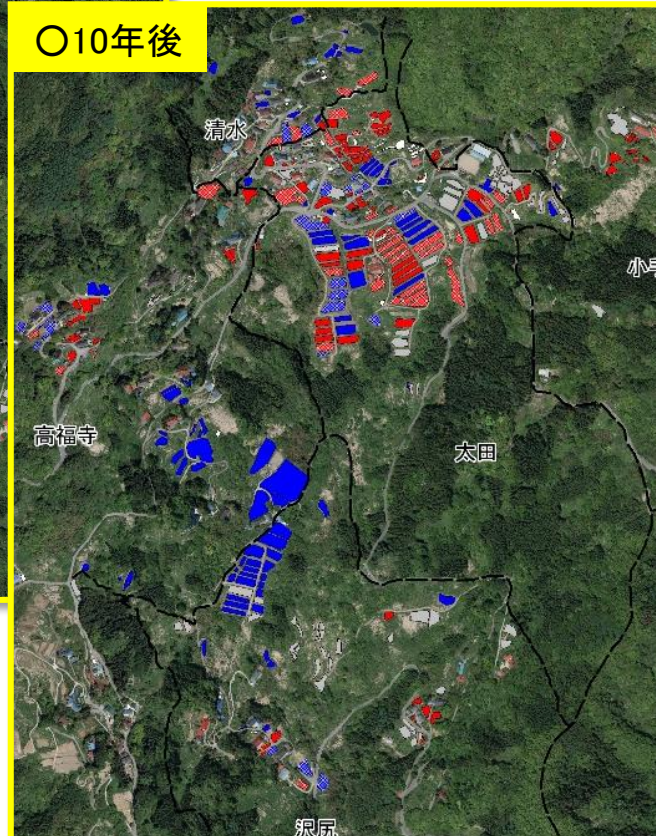
〈現在と10年後の農地の耕作者年齢及び後継者の有無〉

〈空き家の現況〉

○現在

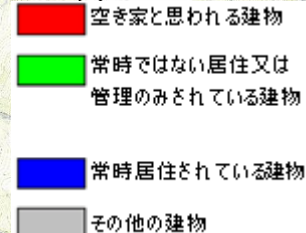
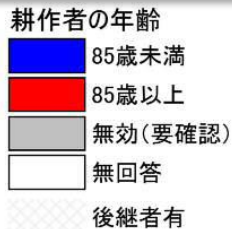


○10年後



下図：長野市総合マップ

下図：長野市総合マップ



- 議題1で再確認・再点検した図面等を見ながら、主な土地利用について、過去の様子やこれまでの変化、現在、顕在化している課題や懸念、将来について、意見交換を行った。

〈主な意見〉

	過去	現在	未来
森林	<ul style="list-style-type: none"> 山に行っても<u>獣がいなかった。</u> <u>林業の衰退も大きい。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 森林所有者が<u>赤字で手入れをしない。</u> <u>竹が沢山生えて大変。</u> 木が生えて景色が<u>見えなくなり残念。</u> <u>クマが多く山に入れない。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 森林が密集していて人が入りにくいだが、<u>間伐すれば美しく見え、山菜採りもできる。</u> <u>竹やぶの手が付けられなくなる可能性。</u> <u>薪の需要が増える可能性。</u>
農地	<ul style="list-style-type: none"> <u>農地だった場所にスギが植林された。</u>今後の管理は難しい。 かつて田んぼ、畑等だった場所の多くが<u>自然に返った。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 数年後には<u>田畑はできない。</u> <u>急斜面のため草刈りが大変。</u> <u>畔の維持は棚田ならではの大変さ。</u> <u>竹が生えると農地への影響が大きい。</u> <u>桑畑だった場所はヨシが生えて木が生えず、荒れる。</u>スギが植えられた場所は<u>まだまし。</u> <u>イノシシに負けそう。</u> <u>綺麗に管理するモチベーションを保つためにサクラを植えている。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> <u>野生鳥獣の棲家、動物園に。</u> <u>田畑の森林化で家が囲まれて防犯上心配。</u> 田沢沖の棚田は高福寺と沢尻の動線。<u>地域のつながりのために守る必要がある。</u> 栃倉の棚田は、<u>圃場整備の合意形成に苦労した。</u>将来もなんとか守りたい。 <u>ハゼ掛けが厳しい。機械化が必要。</u> <u>手間がかからない山菜に期待。</u> <u>道路沿いに無い農地は管理が困難。</u> <u>定年帰農のニーズがある可能性。</u>
宅地	<ul style="list-style-type: none"> 昭和33年に<u>小学校が廃校。</u> <u>集落の位置は変わっていない。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> <u>空き家が朽ち果てており、切なくなる。</u> 木が大きくなり<u>集落や北アルプスが見えにくくなった。</u> 移住希望者がいても<u>貸し手がない。</u> 10年～20年前は<u>閉鎖的だったが、人が減ってきて変わってきた。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> <u>家を貸すのは難しい。</u>家が壊れた修理が家主では貸す人がいない。 未来は若者の移住者が<u>増える可能性。</u> 田舎の役員などを減らして、<u>移住者の負担を減らさないといけない。</u>

- これまでに収集・整理してきた各種情報等を重ね合わせた図面を見ながら、地域で守っていききたいもの(エリア)を地図上で把握し、それを守る上での課題などを整理・共有した。

〈主な意見〉

特に守りたい場所として挙げられた主なエリア(右下図の①～③に対応)

- ① 虫倉山の登山道、村を一望できる見晴らし台、観音様があるなど、観光資源でもあり、地域の心の拠り所。
- ② 栃倉の棚田(棚田100選)。棚田の風景は観光資源でもあり、地域の心の拠り所としても重要。
- ③ 田沢沖の棚田(棚田100選)。沢尻、高福寺の両集落の動線にあり、荒廃すると集落が分断される(見えなくなる)。

できる限り守りたい場所に関する意見

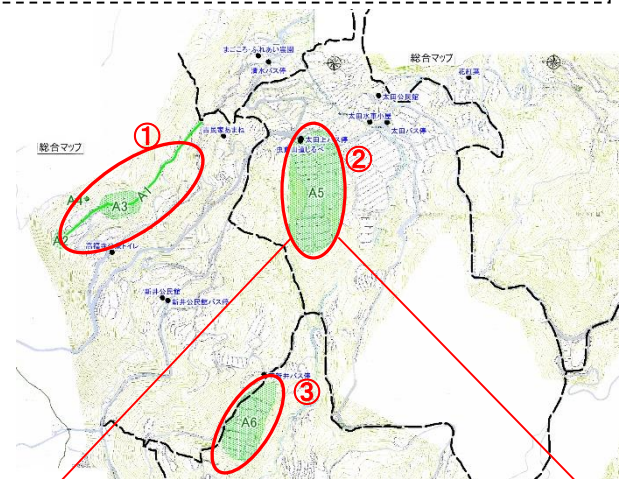
- 機械での営農が可能なところはできる限り残したい
- 集落はできる限り残したい

土地の管理を諦めざるを得ない場所に関する意見

- 機械での営農が不可能で、後継者も見込めない農地等

守りたい場所で生じている課題に関する意見

- 10年後、20年後を想定すると、栃倉の棚田と田沢沖の棚田のみでも維持は不可能。外から縁者も含めて担い手を確保する必要がある。
- 集落営農の実施、コンバインの導入、畦畔の草刈りの軽減等により省力化を図る必要がある。
- ほとんどの農家は自家消費が中心。農協に出すのは手間がかかるうえに儲からない。販路があれば、どれだけでも作りたいという人もいるが、新たに付加価値を付けてコメを売り出す仕組みが必要。
- 電気柵が個人単位で設置されており、エリア全体では未対応。
- 居住者がいなくても管理されている家も多い。将来に向けて、空き家を世話してくれる人や、相談を受ける人が必要。



特に守りたい場所として挙げられた主なエリア(位置図)



長野市旧中条村伊折地区の栃倉の棚田(日本棚田100選)

- 以下のフロー図及び検討チャートの考え方も踏まえ、地域で守っていきたいもの（エリア）を守れなかった場合に生じる問題等について、意見交換を行った。

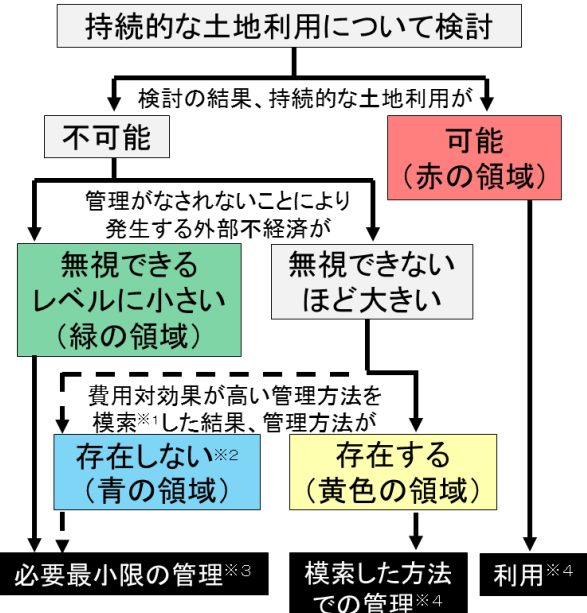
〈主な意見〉

- 地域のシンボルが耕作できなくなるのはさみしく、伊折地区に住む意味すら失う。
- 一番大事なのは道路の確保。現在は集落で草刈りを行い、道路を守っている。草刈りの人不足を出身者が補っているが、出身者の子ども世代は参加していない。

※ 土地を維持できないことそのものを問題ととらえる意見が多く、土地が維持されないことにより発生する二次的な影響を懸念する意見も出されたものの、限定的であった。つまり、下記のフロー図(注)で赤の領域と判断されたかった土地のほとんどが、緑の領域と判断されていたと考えられる。

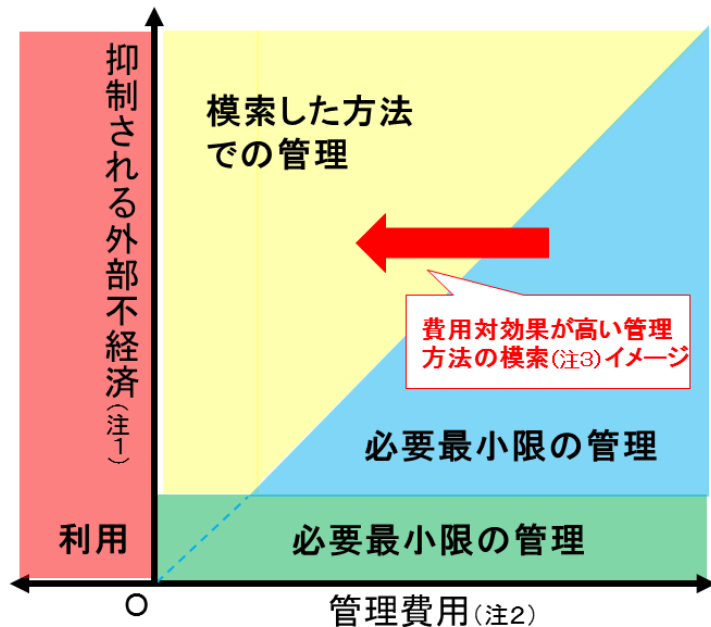
(注)第11回国土管理専門委員会資料では、持続的な土地利用が不可能な状況をフロー図の出発点としていたが、地域の土地全体について総合的に議論を行うため、持続的な土地利用の可否について検討することを出発点とし、利用可能な領域として、「赤の領域」を追加した。

〈検討フロー図〉



- ※1:チャートのイメージを参照
- ※2:十分な模索を行ってもなお管理方法が見出せない場合に限る。
- ※3 外部不経済の定期的な把握等が想定される。
- ※4 持続困難になった場合に備えて複数のシナリオを事前に描いておくことが重要

〈検討チャート〉



- (注1)抑制される外部不経済 = 「一人当たりの抑制量」 × 「管理による恩恵を受ける人数」とする。
- (注2)管理により得られる収入がある場合は、当該収入を差し引いた額を管理費用と定義する。 ※補助金・交付金等は含まない。
- (注3)費用対効果が高いと考えられる方法であっても、必要な人手が確保出来なければ実施できない可能性があることに留意が必要。